竹中ナミ Takenaka Nami
社会福祉法人プロップ・ステーション
理事長、NHK 経営委員

八木淳司 Yagi Jyunji
モロゾフ株式会社
テクニカルディレクター
オーストリア国家公認製菓マイスター

山田貴夫 Yamada Takao
日清製粉株式会社
取締役・東京営業部長

さいって言われる方が多いんです。

山田　KSCの講師の皆さんは熱いというか、真剣です。そういうなかに入って、パティシエの方とコミュニケーションできるのは大変ありがたい機会です。小麦粉を納めていても、直接話をする機会はほとんどありませんので。

誇りを持ったチャレンジドたち

八木　講習の初めは僕らも緊張しますが、チャレンジドたちはものすごく緊張するんです。それが回を重ねるごとにだんだん目の色が変わり、本気になってきたというか、話す言葉も増え、目に見えて変化が出てくるんです。こんなに変わるんだと、毎回驚いています。

竹中　チャレンジドたちの多くは、本当のプロの厳しさに触れたり、プロの目の前で何かを習うという経験がこれまでなかったんです。家族とか施設の職員とか、いつも守ってくれる人に囲まれ、鍛えられるとか、失敗したときに温かくかつ厳しく注意してもらうことがないままにきています。最初は緊張しますが、回を重ねてくると、彼らも自分にとってすごく大きなものが得られる場所やということがわかる。そのとき、彼らにとってKSCは安心できる場所であり、鍛えられる場所であり、誇りを持てる場所になるんです。福祉の対象と言われたとき、チャレンジドたちは無意識のうちに誇りを捨てさせられているんです。「あなたたちは障がいのあるネガティブな存在だから、周りの人に守られてこんなことをやっているんですよ」という暗黙の包み込みがあるんです。緊張がほどけていくということは、安心しながらも自信につながり、それが誇りになるんです。

八木　障がいは一人ひとり違います。だから、新しく講師になる方には、作業の仕方や動きを一人ひとりきちんと見てくれるようお願いしています。出来映えの良し悪しではなく、作業の仕方や動作を見ることで、その人の理解度を測ることができるのです。それをつかめば教え方もわかってくる。そのために初回は簡単な作業の内容ですし、受講生を8名にしているのも、目が届く範囲ということからです。

竹中　日清製粉の技術スタッフの方々は、チャレンジドたちの動きをうまいこと支えているんです。日清製粉の社員の皆さんは「誠実」の一言で、自分の本業の中で最大のパフォーマンスを出してくれはるんです。

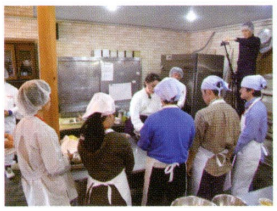
山田　KSCはビジネスでは得られない充実感があるようです。どう接したらいいのか、戸惑ったと思うんですが、参加する中でプロジェクトの意義を肌で感じてくる。そうなって動きも変わってきたんでしょう。非常に大きな財産です。

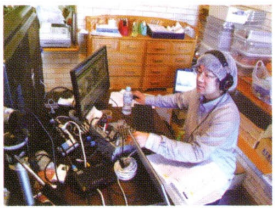
遠隔講習が業界を変える!?

八木　KSCでは新たな試みとして、3回目から通信ネットワーク技術による遠隔システムを使って離れた会場と講習を共有していますが、これは非常に新鮮です。

竹中　わたしらは ICTセミナーを二十数年やってきているので、つながる道具としてICTの有効性はわかっています。チャレンジドはつながるとか、発信することにハンディがあるので、ICTを使いこなすことで社会や人とのつながりができるようになります。だから、KSCプロジェクトでもICTを使って世の中に発信するべきやし、会場に来れない人がICTで学ぶチャンスを得るという

●プロップが構築・運用できるようにした遠隔システム





撮影は民生用ハンディタイプのハイビジョンカメラ(写真㊧)

遠隔システムのオペレーションも自前で (写真㊨)